

中日新聞
「リンクト」**LINKED**
P R E S E N T S
病院を !
I KNOW! HOSPITAL AND MEDICAL
知ろう

大垣市民病院

企画制作 中日新聞広告局 編集 プロジェクトリンクト事務局

命を救う。
そのための技術を
どこまでも追い求める
匠の教え。

HERE! e-LINKED
www.project-linked.jp/



志の高い者にこそ、来て欲しい――。 20年間365日、命を救うために 研鑽を続ける〈外科医〉の医師教育。

単に手術数が多い病院から、質を伴った病院へ。ある外科医のためまぬ努力が、大垣市民病院を「一流」として支え続けてきた。20年間365日、休みなく修練を続けてきた「確かな技術」。

それが今、次世代を担う医師へと着実に伝承されようとしている。そこには「外科医というアスリートたち」だけが理解し共感できる、独自の教育方針があった。

医療を変えてきた スーパードクターの存在。

01

さかのぼること今から20年前、当時の大垣市民病院は、すでに圧倒的な手術件数を誇る病院として知られていた。だが、一人の医師の目には、「確かに数は多いが、質が伴っていない」と映った。「量じゃない。質を上げないといけない」。赴任したばかりのその若い医師は、その心に固く決意する。このときの医師こそ、現在、外科部長兼消化器外科部長を務める金岡祐次医師だ。



「患者さんはたくさん来てくださるものの、質の高い手術ができていなかった。極端な話をすれば、高度な技術を要しない手術を数多く行っている状況でした。だから、まずは私の専門である肝臓、胆のう、脾臓の領域で、レベルの高い手技を導入したので。すると噂を聞きつ

けて県外からも患者さんが集まるようになった。こうして好循環が生まれていきました」。

金岡医師は大学病院でも実施が難しい手術を次々と行い、その症例数を積み重ねていく。例えば、20年前には、肝切除手術は年間20例ほど。これが金岡医師の赴任後10年間で、年間100例にまで大幅に増加した。そして、これを元に学会発表や論文の作成に力を入れ、多くの医師たちに大垣市民病院の手術レベルを周知。患者の紹介を引き寄せる力になっていった。

20年間365日。休みなく努力を積み重ねてきた一人の外科医が、現在の大垣市民病院の礎を地道に築き上げていったのだ。

外科医は、「解剖学」。

これを基礎にしながら

「短時間」を追求し続ける。

02

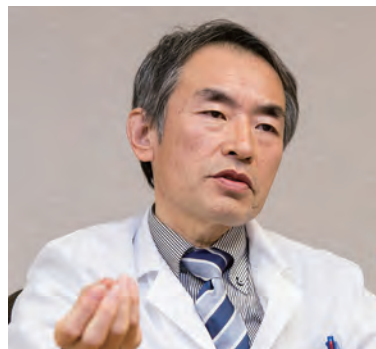
外科医はいわば職人である。圧倒的に技術がものをいう世界だ。だからこそ視力や反射神経、筋力などすべての面で一流であらねばならない。だが、長らく大垣市民病院の外科を牽引してきた金岡医師は、今年で56歳を迎える。肉体的にはすでにピークを過ぎた年齢だが、今なお、さらなる高みをめざして研鑽を続けている。

現在、金岡医師は、経験豊富な開腹手術だけでなく、侵襲の少ない腹腔鏡手術にも果敢に取り組んでいる。「50代半ばにさしかかり、一般的な開腹手術を

やり尽くした私のような男が、あえて腹腔鏡手術を一からやり始める。これが大事だと思う。大学病院ならすでに教授クラス

の年齢で、一から腹腔鏡手術をやるかといったらたぶんやりません。でも、上に立つ人間が自分の姿で見せるべきだと思うのです」。

そんな金岡医師が最も大切にするのは、とにかく手術を早く終わらせることだ。手術時間が長ければ、その分、予後に悪影響を及ぼす。金岡医師が腹腔鏡手術に取り組むのは、患者の選択肢を増やすためである。「あくまで外科医の基本は解剖学だと思う。それを基礎にした上で開腹手術や腹腔鏡手術がある。



匠をめざす医師たちの「アスリート養成所」。

03

最近では腹腔鏡手術ありきの風潮もありますが、そうじゃない。腹腔鏡手術の欠点を補うためにも、これからも開腹手術という選択肢はなくなないと確信しています」。

新たな技術を貪欲に求め、最適な手術を行えるように自分をブラッシュアップし続ける。ストイックに理想の手術を追い求めるその姿は、さながらアスリートの姿を見るかのようだ。

「なぜ大垣市民病院の外科は、金岡一人しかいないのか。あれだけの手術ができるのか。当初はそんな風に言われました。あまりの珍しさに大学から見学が来るぐらいでしたから。でも、一人でもできるんです」。こう

言い切る金岡医師。非常に高度な外科手術となれば、当然のように他職種を含めたチームで動く必要がある。それでも、「個の力」が最も重要だと金岡医師は説く。

神の手、スーパードクター……。腕利きの外科医たちがそんな言葉で喝采をあびる一方で、「一人の外科医がいるだけではだめだ」と冷やかな眼差しを向ける論者も少なくない。だが、金岡医師はこうした論調を真っ向

から否定する。「例えば、私が周りのレベルに合わせたらどうなるか。患者さんに提供できる医療のレベルを落とすことになりません。だから私が一人浮いたとしても、100%の力を出し切る。私が下がるのではなく、みんなが上がってこい。そ

れが私の考え方です」。常に100%の力を発揮することで、周囲が「できない」と思っことをやって見せる。自らその姿を見せることで、チーム全体が徐々に成長していくのだ。

●大垣市民病院は、圧倒的に多くの症例数を抱えている。そのため、本文で登場した外科に限らず、研修医の教育は「質より量」が基本とされてきた。膨大な経験を積ませることで、「骨の髄まで覚えこませる」というのが、伝統的な教育スタイルなのである。どんな治療をすればいいのかを瞬時にイメージする力、適切な検査や治療方法を選ぶ力など、研修医たちはさまざまな症例を経験するなかで、多くの気づきを得て、着実にスキルを高めていく。

●ただ、同院では、専門的な技術を身につけるための症例が充分にあることから、逆に一般的な症例に対する教育が手薄になりがちだった。そこで近年は、初期診断のスペシャリストである総合内科の医師が主導し、研修医が初期診断を学ぶためのカリキュラムも整備している。従来の高い専門性に加え、医師の基礎となる総合性もきちんと学べる。そんな環境が整備されているのが、同院の医師教育の特長だ。



C O L U M N

中日新聞
「リンク」
LINKED
PRESENTS
病院を
知ろう
I KNOW! HOSPITAL AND MEDICAL

いるわけではありません。でも、最初から『あきらめなさい』とは言いません。今までもこの病院で求められることがでぎず、去っていった若い外科医もいます。ただ彼らも去っていった先では、十分に力を発揮できるだけのスキルを身につけている。こうした教育方法は、私独自のやり方ですが、決して間違っていないと思います」。

トップアスリートである指導医が、自ら手本を見せる。その姿を見ながら、次なるアスリートが育っていく。ダントツのナンバーワンをめざした教育。そんな医師教育も、未来の医療を支える上で大切な教育法の一つなのかもしれない。

英才教育を受けた者には敵わない。
だから、

私は大垣市民を選んだ。

04

「金岡先生といえば、やつぱり手術です。『本当に人がやっているんだろっか』と驚嘆したことが結構ありますよ」。そう金岡医師を評するのが、現在、金岡医師のもとで研修を受ける大塚新平医師だ。彼が大垣市民病院を選んだのは、学生時代に所属

した卓球部での経験が根底にある。「私は中学時代から卓球を始めましたが、どうやっても小さな頃から練習してきた人には勝てない。それを肌で感じていました。だからこそ、外科医として圧倒的な技術を身につけるためには、〈強豪校〉で医師としてスタートを切りたい。そんな発想から、厳しい環境の大垣市民病院で自分を鍛える決断をしました」。

大学卒業後の医師は、国が定めた2年間の初期研修と、その後3年間の後期研修を経て一人前の医師へと育っていく。後期研修3年目の大塚医師は、大垣市民病院での教育を振り返りながら、「この病院で学ぶ本当の価値は、後期研修にこそある」と話す。「忙しく、とにかく手



術件数が多い。私自身、年間100例ほどの執刀を担当しています。確実に技術が身につく環境だと思いますね」。

「志なきものは去れ」。大垣市民病院は、それほどに厳しい修練の場だ。だが、意外にもその門を叩いたものが志半ばで辞

めるケースは少ない。そこには研修医が高い志を持てるだけの環境があるからだ。「最高峰をめざしたい」。一流の技術を身につけたい。匠の技を手にしたいと願う求道者にとって、大垣市民病院はまさに理想の場であるに違いない。

BACK STAGE

●「外科医たるもの、休みはないのが当然です。もちろんずっととは言わないですが、若いうちは365日病院に出るぐらいの気概がないと、一人前にはなれないです。それに、患者さんの術後管理のことを考えたら、休めるでしょうか。これは金岡医師の言葉である。外科医の本質とは、専門を究め、技術を究めること。技術の習得には圧倒的な手術件数をこなす経験が必要だが、その裏には、技術を磨こうと常に研鑽に励む「圧倒的な自己犠牲」がある。

●野球に例えるなら、ハイレベルな環境下にある大垣市民病院は、さながら「メジャーリーグ」といったところだろう。外科医として、そこまでの高みをめざさないのであれば、むしろ別の病院を選ぶ方がいい。厳しいのは承知の上で、あえて超一流をめざしたい。そんな人たちが集う場所なのだ。だからこそ、20代は死に物狂いで修練に励まないとけない。目標は最先端の医療を担うスペシャリスト。同院はそんな医師が学ぶ教育の場なのである。

企画制作

中日新聞広告局

編集協力

大垣市民病院

〒503-8502

岐阜県大垣市南類町4-86

TEL 0584-81-3341(代表)

FAX 0584-75-5715

<http://www.ogaki-mh.jp/>

お問い合わせ

中日新聞広告局広告開発部

TEL 052-221-0694

FAX 052-212-0434

プロジェクトリンク事務局

TEL 052-884-7831

FAX 052-884-7833

<http://www.project-linked.jp/>

中日新聞
「リンク」
LINKED
PRESENTS
病院を
I KNOW! HOSPITAL AND MEDICAL
知ろう

プロジェクトリンク

検索

LINKED VOL.13 タイアップ